

家族関係に及ぼす犬の影響について

東北大学大学院教育学研究科准教授

若島孔文 (わかしま こうぶん)

Profile — 若島孔文

2000年、東北大学大学院教育学研究科博士課程修了。博士(教育学)。臨床心理士、家族心理士、家庭犬訓練指導士。日本家族心理学会常任理事やKCJ日本愛犬福祉協会審査員等を兼任。専門は臨床心理学、家族心理学。主な著書は、『家族療法プロフェッショナル・セミナー』(単著、金子書房)など。



近年、不景気な経済状況にあるわが国ではありながら、ペットブームが生じており、ペット産業が発展してきています。動物介在療法にかかわる研究ではなく、動物を家族の一員として迎え入れることで家族に何が生じるのかという、より一般的な問題への関心から私たちの研究はスタートしています(若島, 2007)。私たちの研究グループは犬バカが集まりであり、犬を迎え入れたことにより生じるトラブルは家族療法の対象となり、犬自体を飼い主とともに訓練することもあるし、飼い主に対してカウンセリングを実施することもあります(若島他, 2010)。多くの犬に関するトラブルは、犬という動物を知らないことや、犬種特性を理解せずに選択している場合などが多いように見受けられます(若島他, 2010)。さて、ここでは最近に私たちが行った66家族についての調査の結果を紹介したいと思います。

調査対象家族に関する基礎的情報 調査は質問紙(質問項目および自由記述)を用いて実施しました。筆者は犬の訓練士でもあり、ブリーダーでもあり、ドッグショーの審査員でもあり、犬の専門家とのつながりが多いのですが、そのような専門家は対象とせず、ごく一般の家庭で犬を家庭犬として飼育している方々を対象としまし

た。調査時期は2010年8月から2011年7月でした。記入者の続柄は母親22名、父親9名、子ども16名、祖父母3名、夫3名、妻13名。子どもの同居の有無では、同居ありが48家族、子どもの同居なし(子どもが巣立った家族を含む)が18家族でした。同居家族の世代は三世代家族が15家族、二世家族が35家族、一世家族が16家族でした。平均同居家族数は3.40人(SD 1.33)。住居形態は一軒家52名、マンション3名、アパート8名、その他3名。居住地域は郊外14家族、住宅地48家族、都市部中心地4家族。飼育している犬種はミックス10、ミニチュア・ダックスフント8、柴犬8、ラブラドルレトリバー7、チワワ7、シーズー4、トイプードル3、ヨークシャーテリア3、パピヨン3、ゴールデンレトリバー2、ビーグル2、パグ2、マルチーズ1、ドゴ・アルヘンティーノ1、ミニチュア・シュナウザー1、イングリッシュ・コッカースパニエル1、バセンジー1、フレンチブルドッグ1、日本スピッツ1で、雑種を除けば小型犬が多いですが、小型から大型までのさまざまな犬種のオーナーでした。

家族関係の変化 愛犬を迎え入れることによりどのように家族関係が変化するかについて検討する

ため、66家族のうち、子どもと同居する48家族を対象に「飼育前」「飼育直後」「現在」の三時点の時期を独立変数に、家族構造測定尺度の下位項目である父母間、父子間、母子間それぞれの「結びつき」、ならびに父母、父子、母子の双方向の「勢力」を従属変数とした分散分析を行いました。その結果、父子間の結びつき、母子間の結びつき、ならびに母親から父親に対する勢力、子どもから母親への勢力得点に5パーセント水準で有意差が認められました(なお、子どもから父親への勢力得点に10パーセント水準で有意傾向が認められました)。多重比較(Bonferroni法)の結果を下記に示します。

父子間の結びつきは、
飼育前 < 飼育直後 = 現在
母子間の結びつきは、
飼育前 < 現在、飼育直後 < 現在
子どもから母親への勢力は、
飼育直後 < 現在
母親から父親に対する勢力は、
飼育直後 < 現在

以上の結果からは、愛犬を家族に招き入れることにより、親子間(父子間、母子間)の結びつきが強くなること、子どもの両親に対する勢力が上がるということが理解されました。自由記述の結果と照らし合わせて考えると、愛犬を家族に

迎え入れることで家族内のコミュニケーションや各成員間の交流頻度が増加し、家族の結びつき、とりわけ各親との結びつきを強めることがわかります。さらに子どもが愛犬とかかわることで責任感や活発な家族成員との交流が増えることが、家族内での子どもの影響力を高めていると考えられました。

家族構造が変化している家族の質的分析 続いて、上記した分散分析の結果が有意であった変数の変化量（飼育前から現在を引いた値）を基準にクラスタ分析を行いました。デンドログラムを基準に各クラスタに含まれる被験者数やクラスタの解釈可能性の観点から検討し、2クラスタを抽出しました。そのうちの一つのクラスタ（ $n=10$ ）の特徴として、変化量が正の値を示していることから、家族の各関係性が愛犬を飼育した時期から変化している（結びつき、および勢力が高くなっている）群と考えられ、このクラスタに位置する家族を抽出し質的に検討しました。この結果から、①住居地域は住宅地

であるが一軒家が多く、ほとんどが室内飼育である、②愛犬数は1匹が多い、③犬種は雑種2匹を省いて、比較的飼いやすい犬種である、④愛犬として初めての犬であることが多い、⑤飼育選択者と主飼育者が同一の人物であることが多いことを見出しました。

以上の結果を踏まえると、住宅地という周囲のコミュニティとのかかわりがある環境、そして一軒家内という居住スペースが十分である場所の要因が挙げられ、また、室内飼育にて飼育数が一匹であることから、愛犬を媒介とした家族間の相互交流が盛んになるものと考えられます。さらに、初めて愛犬を飼育した家族が多いため、家族関係の変化が顕著であったと考えられます。最後に、飼育選択者と主飼育者が同一であること、つまり、どのような愛犬を家族に迎え入れるかについて選択し決定した人物と、主に愛犬の世話をする人物が同じであることが示唆されました。このことは、愛犬を家族に迎え入れることのみで家族関係

が変化するというより、飼育を決めた人物が責任をもち、その後も世話をするという一貫した姿勢が重要であるといえるでしょう。

最後に、愛犬を飼ってよかったこと、困っていることの2点について、自由記述をKJ法により分類しまとめました。なお、自由記述は複数回答を含みます。こちらに関しては、表を見たほうがわかりやすいと思いますので、以下に添付します。

付 記

ここで紹介した研究は、東北大学大学院教育学研究科の狐塚貴博さん、張新荷さん、平泉拓さんとの共同研究の一部であることを付記しておきます。

文 献

- 若鳥孔文（編著）（2007）『犬と家族の心理学：ドッグ・セラピー入門』北樹出版
 若鳥孔文・パンク町田・狐塚貴博（2010）『愛犬のトラブル解消のためのプリーフセラピー』アルテ

■愛犬を飼って良かったこと

- 1. 心理的安定** $n=33$
癒し
気持ちが癒される、犬の純粋さに癒される、犬の存在に癒される
情緒的恩恵 $n=14$
心が穏やかになる、優しく気持ちになる、寂しくなくなった
- 2. 家族内コミュニケーションの促進**
家族成員間の交流 $n=37$
家族の会話が増えた、家族の絆が深まった、家族の雰囲気良かった
夫婦間のとりもち $n=7$
夫婦間のとりもちをする、夫婦間の会話が増えた、夫婦間の気まずい雰囲気の解消
- 3. 生活の質の向上**
生活の豊かさ $n=15$
毎日が楽しい、生活が豊かになった、元気をもらえる
コミュニティーの拡大 $n=14$
地域の人と交流が深まった、人とのつながりが広がった、犬友達と新しい出会いがある
- 4. 飼育者自身の心身への肯定的影響**
飼育者自身の健康への配慮 $n=13$
散歩による健康維持、生活リズムが整った、深酒をしなくなった
生命への関心や思いやり $n=12$
他人や犬を思いやる気持ち、動物愛護に関心をもった、命の大切さを学ぶ
飼育者自身の心理的成長 $n=10$
悲しみを乗り越えるところ、夢を見つけることができた、責任感をもてるようになった
子どもへの肯定的影響 $n=10$
相手のことを考えるようになった、穏やかになった、明るくなった

- 5. 番犬としての機能** $n=3$
番犬になるので安心、吠えるので安心感がある
分類不可能 $n=4$
なし $n=4$

■愛犬を飼って困っていること

- 1. 行動の制限** $n=30$
旅行に行けない、長時間留守にできない、外出が減った
 - 2. しつけに関する悩み** $n=26$
無駄吠え、とびつく、かみつく
 - 3. 室内飼育の悩み** $n=22$
抜け毛、トイレ、家具の損傷
 - 4. 死別・将来の不安** $n=10$
いずれ訪れる愛犬との別れ、死別の悲しみ、震災時の非難による別れ
 - 5. 出費** $n=9$
病気による出費、冷房の使用による出費、手術費やおむつ代の出費
 - 6. 犬の病氣** $n=4$
病気の時、病気の時の世話、病気の知識不足
 - 7. 散歩の時間** $n=4$
散歩の時間、寒くなってきた時の散歩、散歩時の危険
 - 8. 顔の問題** $n=3$
食べない顔がある、与える餌を食べない、アレルギー反応
 - 9. 人間へのアレルギー** $n=2$
毛が抜けてアレルギーになる、室内飼育により動物アレルギーを発症
- 分類不可能** $n=12$
なし $n=9$

いずれも85家族を対象に、KJ法で分類。